

独立行政法人 教員研修センター委嘱事業

平成19年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

成果報告書

プログラム名	盲・聾・養護学校特別支援教育コーディネーター養成におけるアドバンス研修プログラムの開発
専門性の高い特別支援教育コーディネーター養成をめざしたアドバンス研修として、アセスメントスキル、巡回相談スキル、プレゼンテーションスキルの習得を機軸とした実践的な研修カリキュラムを開発する。	

平成20年3月

大阪大谷大学教育福祉学部

1 カリキュラム開発のねらい

平成 19 年度から「特別支援教育」が本格実施され、盲・聾・養護学校（特別支援学校）は、地域の特別支援教育のセンター的な機能を果たすことが求められている。その機能を発揮していくためには、自校教育の一層の充実を図ることを大前提とし、さらに、幼稚園・小中学校等のニーズに応じた支援を担っていくためには、盲・聾・養護学校教員のさらなる専門性の向上と育成が重要な課題となっている。

こうした課題に対応するために、大阪府においては平成 15 年度から、盲・聾・養護学校地域支援コーディネーター養成研修とそのフォローアップ研修が実施されてきた。その研修成果として、各校に複数の研修修了者ができたことから、年々地域からの要請に基づく支援機能が発揮されるようになってきている。しかしながら、校内において指導的立場を担う（中核となる）教員の育成、個別の教育支援計画の策定と活用、校内における地域支援体制の整備等の課題が依然として残されており、盲・聾・養護学校の専門性を高めていくための新たな方略が必要となっている。

特別支援学校教員養成課程を有する本学は、このような現状と課題から、盲・聾・養護学校において、他の教員をスーパーバイズできるより高度な専門性を有する教員を育成し、研修修了後にはその教員が中核となって専門性を伝達・波及していくシステムづくりが必要ではないかと考えた。

こうした高度な専門性向上を目的とした研修は、公平性や希望制を基本とする公的な（大阪府として実施する）研修の中で実施していくことは難しい。そのため、大学が主体となって研修カリキュラムを開発し、実践・評価・改善していくプログラム開発は、重要な意義を持つものと考えられる。その成果は、今後の大学と教育委員会との連携研修のモデルとして、他の地域への波及効果も期待できるものと考えられる。

2 研修内容・項目について

専門性の高い盲・聾・養護学校特別支援教育コーディネーター養成をめざしたアドバンス研修として、身につけるべき必要な知識・技能の機軸を次の 3 つに集約し、少人数制で実践的に研修を進めた。

※別紙 1 に全 16 回の研修日程・内容・講師等の一覧を示した。

- (1) 障害のある子ども一人一人のニーズを把握し、適切な指導計画を作成・実施・評価するための「アセスメントスキル」（計5回実施）
- ①演習：WISC-Ⅲ検査の実施・解釈スキル演習
 - ②演習：K-ABC検査の実施・解釈スキル演習
 - ③実習：検査の実施
 - ④演習：検査の実施・解釈のスーパーバイズ演習
 - ⑤演習：検査結果の報告書作成演習
- (2) 校内及び地域の巡回相談・教育相談を担当するための「巡回相談スキル」（計5回実施）
- ①実習：幼稚園、小学校、中学校、高等学校への巡回相談実習（大学教員に同行して、巡回相談を担当し、大学教員からスーパーバイズを受ける実習研修）
 - ②演習：模擬校内委員会（事例検討の進め方）
 - ③演習（実習）：巡回相談報告書の作成
- (3) 幼稚園・小中学校等の研修を担当するために必要な「プレゼンテーションスキル」（計4回実施）
- ①講義：プレゼンテーションの意義・活用・倫理
 - ②演習：わかりやすい伝え方、説明の仕方スキル（模擬講義・演習）
 - ③演習：興味を引くプレゼンテーション資料作成の実際
（パワーポイントの活用・応用：動画・音効果の活用等）
 - ④討議：プレゼンテーション資料、教材（スライド・コンテンツ）の共有について（著作権等について）
 - ⑤演習A：障害種別の学校紹介プレゼンテーションの作成
（知的障害養護学校・肢体不自由養護学校、聾学校等の紹介）
 - ⑥演習B：発達障害の理解と支援についてのプレゼンテーションの作成
（LD、ADHD、高機能自閉症等の理解と支援について）

この3つのスキルを全般的に研修することを前提としながら、受講者のニーズに応じて中心となるコースを選択し（アセスメントスキルコース、教育相談（巡回相談）スキルコース、プレゼンテーションスキルコース）、個

人の目標に即した研修計画を立てて、自己研修のP-D-C-Aのサイクルに基づいて研修を進めていった。

* 別紙2に個別の研修計画の実例、別紙3に巡回相談記録の実例を示した。

3 研修の実施形態について

本研修プログラム受講者は、すでに大阪府のコーディネーター養成研修を修了し、すでにコーディネーターとしての役割を一定担っている人たちである。すなわち、基礎スキルを有している上に、さらにスキルアップをめざしたアドバンス研修（上級研修）の位置づけであることから、本研修の実施形態は、演習・実習・討議を中心に構成している。

なお、巡回相談研修については、大学と幼稚園、小学校、中学校、高等学校とが連携し、大学教員が担当する通常の巡回相談に、本研修（実習）を重ねて実施することの了解を得て進めてきた。全16回の実施形態は、次の通りである。また、本研修プログラムは、年間を通した研修として位置づけて、各回の研修報告や研修評価の提出を求めた。

回	日程（会場）	実施形態
1	研修オリエンテーション	講義・討議
2・3	巡回相談スキル研修	巡回相談実習
4	プレゼンテーションスキル研修	講義・演習
5	アセスメントスキル研修	講義・演習・実習
6	アセスメントスキル研修	演習・実習
7・8	アセスメントスキル研修	講義・演習・実習
9	中間オリエンテーション	演習・討議
10	プレゼンテーションスキル研修	講義・演習
11・12	巡回相談スキル研修	巡回相談実習
13・14	プレゼンテーションスキル研修	講義・演習
15	巡回相談スキル研修	巡回相談実習
16	プレゼンテーションスキル研修 巡回相談スキル・アセスメント研修	講義・演習・討議

4 研修の実施方法、進め方、留意すべき事項について

(1) 研修の実施方法

① 大学の実施体制について

研修の実施における学内体制としては、養護学校教諭や大阪府教育センター特別支援教育担当指導主事としての経験をもち、盲・聾・養護学校や幼稚園、小中学校等の現職教員に対する指導経験が豊富な准教授が中心となった。発達に遅れのある幼児児童の教育プログラム開発の経験をもつ教授は、行動観察やアセスメントの指導にあたり、巡回相談や子育て支援への助言に豊富な経験をもつ教授は、カウンセリングマインドの育成に関する指導を担当した。また、プレゼンテーションスキル研修においては、情報教育やプレゼンテーションスキルに造詣が深い准教授と専任講師の2名が指導にあたる等、大学内のチームプロジェクトとしての体制で取組を進めた。

②大学と教育委員会の連携及び研修会場

毎回の研修会には大阪府教育委員会指導主事や、大阪府教育センター指導主事が参加し、研修内容や進め方についての意見交換を相互に行った。

研修会場については、大学を基本としながら、計3回の研修を大阪府教育センターで、巡回相談研修については、幼稚園5回、小学校2回、中学校1回、高等学校2回をそれぞれの会場で実施した。

(2)研修の進め方について

- ①大学と府教委の担当者が協議して、アドバンス研修として必要な内容や要素を選定した。大学の研修計画の趣旨を踏まえて、府教委として主体的な連携・活用の在り方が検討され、双方の主体性が融合された研修カリキュラムの開発・実践・評価・改善を進めることになった。
- ②研修参加者の応募については、府教委から学校長に応募要項を配布し、9名の参加が決定した（校長推薦）。
- ③計16回の単発研修でなく、一年間の継続研修としての位置づけと、毎回の評価を計画的・継続的におこなった。
- ④研修の評価と改善については、研修企画者としての評価、受講者による評価、受講者を派遣する管理職（校長等）としての評価の観点で実施した。
- ⑤全研修修了者9名に、研修修了証を授与した。
- ⑥全研修修了後に受講者による「個別の研修計画」の自己評価を実施した。
- ⑦事後評価として、6ヶ月後、1年後に学校及び本人にアンケート調査を実施する（予定）。

5 研修成果について

(1) 研修の実施日程・内容・評価

<第1回研修>

①日 時 平成19年5月21日(月) 14:00~17:00

②会 場 大阪大谷大学

③日程・内容

時 間	内 容	講 師 等
14:00~14:15	あいさつ 大阪大谷大学より 大阪府教育委員会より	大阪大谷大学 教育福祉学部 学部長 岡崎 裕子 大阪府教育委員会事務局 教育振興室 障害教育課 総括主査 松村 高志
14:15~14:45	講師及び研修者等の自己紹介	大阪大谷大学 教育福祉学部 学部長 岡崎 裕子 教授 和田野 康子 准教授 小田 浩伸
14:45~15:00	休 憩	
15:00~15:50	講義(1): オリエンテーション ①研修の目的と内容について ②研修の進め方と評価について ③個別の研修計画の作成について	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
15:50~16:50	講義(2) 「特別支援学校に求められる専門性と特別支援教育コーディネーターの役割」	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
16:50~17:00	事務連絡	

④研修評価

第1回研修は、研修オリエンテーションとして、研修スタッフと研修受講者の自己紹介、及び、研修の目的、内容、期待する成果、研修後の役割等について講義形式の研修を行った。本研修を進めていく上で、研修の計画(Plan)、実践(Do)、評価(See)プロセスを明確にするために、個別の研修計画を作成することを位置づけた。この個別の研修計画については、第1回の研修日から2週間以内に全員(9名)の分が提出された。別紙2に実例を示した。受講者9名において、習得の最優先課題として設定されたスキルは、アセスメントスキル4名、巡回相談スキル2名、プレゼンテーションスキル3名であった。

また、本研修は、モデルカリキュラム開発プログラムであることから、第2回研修からは研修評価アンケートを実施する趣旨について説明した。

<第2・3回研修>

①日 時 平成19年6月18日(月) 9:30~17:00

平成19年6月26日(火) 9:30~17:00

②会 場 ○○市立○○幼稚園

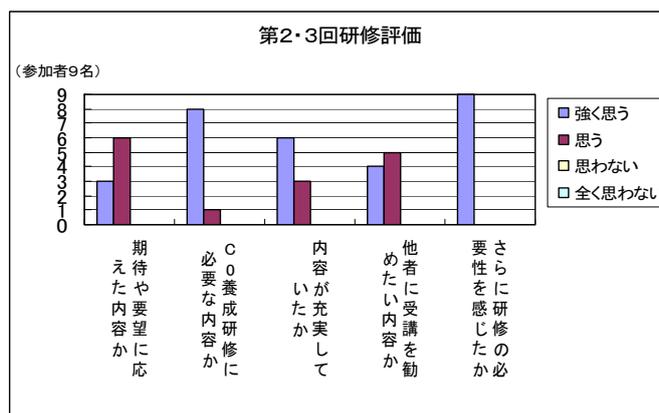
③日程・内容

時 間	内 容	講 師 等
9:30~10:00	オリエンテーション ○○○市教育委員会より ○○○市立○○幼稚園より 事務連絡	○○○市教育委員会 参事 ○○ ○○ ○○○市立○○幼稚園 園長 * * * * * 大阪大谷大学・大阪府教育委員会
10:00~12:00	保育参観	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
12:00~13:00	昼食・休憩	
13:00~14:15	教育相談への打ち合わせミーティング ①相談研修の役割分担 ②事例の検討	大阪大谷大学 教育福祉学部 学部長 岡崎 裕子 教 授 和田野 康子 准教授 小田 浩伸
14:15~16:15	<相談スキル研修(実習)> 教育相談	大阪府教育委員会 障害教育課 指導主事 藤原 彰子
16:15~16:50	研修者ミーティング ① 相談研修の振り返り ② まとめ	
16:50~17:00	事務連絡	

④研修評価

大学と○○市教育委員会が連携し、幼稚園巡回相談を2日間に分けて実施した(受講者4名と5名)。巡回相談の流れとしては、午前中に保育参観、午後から事例検討会で相談実習を行い、終了後に同行した大学教員等から、相談に関する助言や反省点などが指摘された。

研修評価アンケートの結果は次の通りである。体験実習型であったことから、充実感の高い研修になったと考えられる。研修受講者の感想としては、「幼稚園の巡回相談をはじめて体験したことで、幼稚園の活動内容、設定保育と自由遊びにおける行動観察の仕方、掲示物や作品等の見方など、新しい知見と経験を得ることができた」、「幼稚園における特別支援教育の重要性と、特別支援学校として、幼稚園にどのような支援ができるかについて考える有意義な機会になった」という内容が多かった。



<第4回研修>

①日 時 平成19年7月17日(月) 14:00～17:00

②会 場 大阪大谷大学 マルチメディア教室

③日程・内容

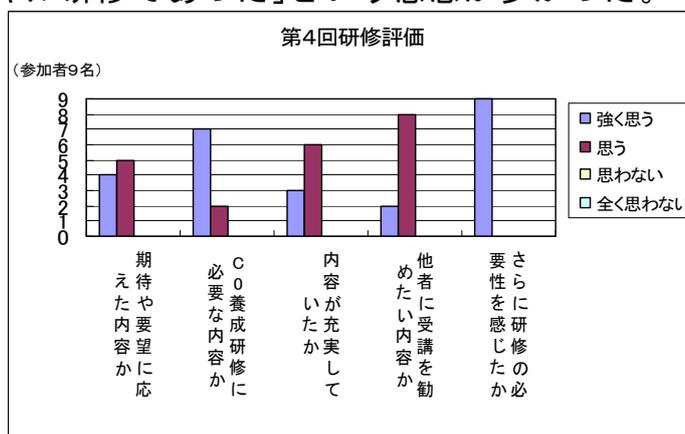
時 間	内 容	講 師 等
14:00～14:10	あいさつ 日程及び研修目的・内容の説明	大阪大谷大学 教育福祉学部 学部長 岡崎 裕子 准教授 小田 浩伸
14:10～15:30	演習「プレゼンテーションスキル演習」 ◇プレゼンテーションの基礎・応用スキル ◇プレゼンテーションの作成演習 ・各種効果の操作スキル ・動画の取り込みスキル ・効果的なプレゼンテーションスキル	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 金川 廣一郎
15:30～15:40	休 憩	
15:40～16:10	講義「プレゼンテーション論」 ◇プレゼンテーションの意義・活用・倫理 ◇効果的なプレゼンテーションについて	大阪大谷大学 教育福祉学部 講 師 開沼 太郎
16:10～16:20	移 動	
16:20～16:50	討 議 「特別支援教育コーディネーターに 求められるプレゼンテーション力とは」	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
16:50～17:00	事務連絡	

④研修評価

プレゼンテーションスキル研修の第1回目であることから、意義、活用・倫理に関する基礎知識に関する講義と、プレゼンテーションのための各種効果、動画の取込等のスキル演習を行った。特に、著作権や個人情報の扱い等について新しい情報を提供することができた。

研修評価アンケートの結果は次の通りである。研修受講者の感想としては、「情報活用の倫理について敏感になるべきことを実感した」、「プレゼンテーションにおける各種効果の活用の仕方や動画活用については、すぐに役立つ内容であり、有意義なスキル研修であった」という感想が多かった。

評価アンケートと感想を総合すると、プレゼンテーションスキルは、コーディネーターの役割を果たす上で、重要なスキルであることを、今回の研修において改めて認識したものと考えられた。



<第5・6・7・8回研修>

①日 時 平成19年8月27日(月) 10:00~17:00 (第5・6回)
8月28日(火) 10:00~17:00 (第7・8回)

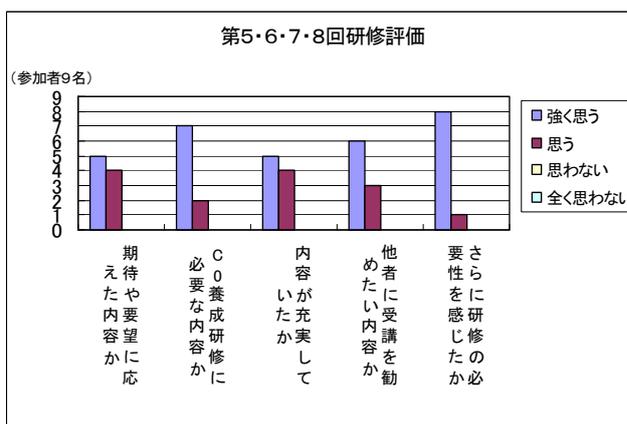
②会 場 大阪大谷大学

③日程・内容

回	日 時	内 容	講 師 等
5 ・ 6	8月27日(月) 10:00~17:00	① 特別支援教育における ・アセスメントの意義と方法(講義) ・アセスメントの意義と役割 ・アセスメントの方法 (行動観察、諸検査、情報収集等) ② WISC-Ⅲの概要と実際(演習・実習) ・WISC-Ⅲの概論 ・検査場面での行動観察演習 ・検査技術演習(新しく学ぶ人への指導) ③ WISC-Ⅲの結果の整理と解釈 ・プロフィール作成演習 ・解釈演習 ④ 指導への活用について(討議) ・個別の指導計画にどう活かしていくか	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
7 ・ 8	8月28日(火) 10:00~17:00	① K-ABCの概要と実際(演習・実習) ・K-ABCの概論 ・検査場面での行動観察演習(ビデオ) ・検査技術演習(新しく学ぶ人への指導) ② K-ABCの結果の整理と解釈(演習) ・プロフィール作成演習 ・事例解釈演習 ③ 指導への活用について(演習) ・個別の指導計画にどう活かしていくか ④ 個別の指導計画の意義と活用 ⑤ まとめ:特別支援教育に関する情報交換	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸

④研修評価

アセスメント演習として、2日間(4回研修分)でWISC-ⅢとK-ABC検査の実施・解釈・指導への活かし方について研修を実施した。また、検査を新しく学ぶ人への指導・支援演習も行い、支援する立場からさらなるスキルアップを進めた。研修者に個人差はあるものの、実態把握の方法にスキルアップが必要であることは、研修評価アンケートからも確認された。研修受講者の感想には、解釈から指導・授業への活かし方について、多くの事例を積むこと、スーパーバイズを受け続ける重要性の指摘が多くみられた。地域支援担当者として不可欠なこのスキルを、継続的・系統的にスキルアップしていく大切さを実感した。



< 第9回研修 >

①日 時 平成 19 年 9 月 3 日(月) 14:00~17:00

②会 場 大阪府教育センター

③日程・内容

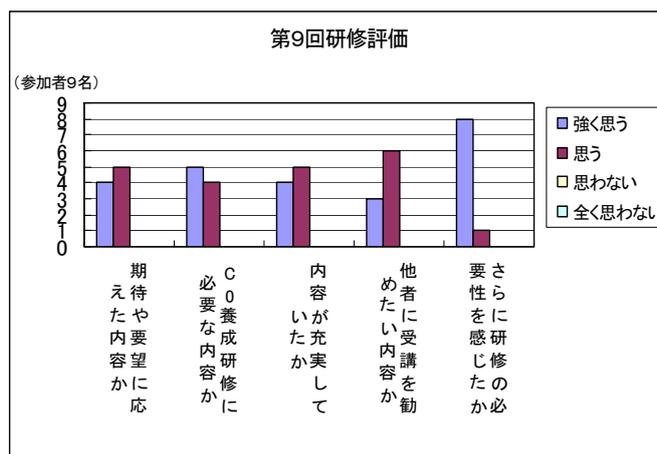
時 間	内 容	講 師 等
14:00~14:10	あいさつ 日程及び研修目的・内容の説明	大阪府教育委員会 藤原 彰子 指導主事 大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
14:10~15:10	演習1「事例検討の進め方」 ◇小学校における模擬校内委員会参加 ◇手続き（KJ法+ランキング法） ◇支援の優先順位を考える ◇盲・聾・養護学校の役割について	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸 大阪府教育センター 指導主事 伊丹 昌三
15:10~15:40	演習2「支援のアイデア検討会」 ◇支援のアイデアとは ◇どれだけ支援のアイデアを出せるか ◇チームアプローチの意義とは ◇地域支援に必要なスキルとは	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
15:40~15:50	休 憩	
15:50~16:50	研究協議 「本カリキュラムの中間振り返り及び 特別支援教育に関する研究協議」 ①今までの研修内容と今後の研修内容 ②盲・聾・養護学校における 専門性向上の在り方 ③小・中学校等への地域支援の現状課題	大阪府教育委員会 藤原 彰子 指導主事 大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
16:50~17:00	事務連絡	

④研修評価

特別支援学校のコーディネーターとして小中学校等への支援を想定し、小学校の校内員会（模擬）でどのように事例検討を進めるか（助言していくか）について、演習・討議形式で研修を行った。また、地域支援の現状と課題、専門性向上のあり方について討論を行った。

研修評価アンケートと感想からは、事例検討の進め方（演習）の時間が十分にとれなかったことを残念に思っている人が多く、再度同様の内容の研修を望む声が多かった。時間配分や焦点化への工夫の必要性を痛感した。

また、地域支援のコーディネーターとして活動するためには、校内支援のあり方についても考えていく必要性があり、その校内体制を構築していく課題についても共通理解ができた。



<第10回研修>

①日 時 平成19年10月1日(月) 14:00～17:00

②会 場 大阪大谷大学 マルチメディア教室

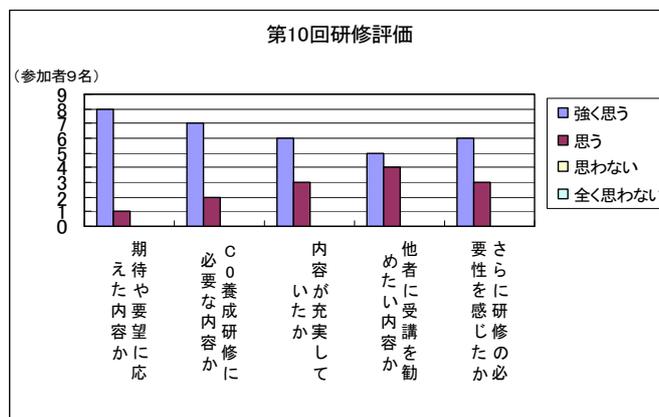
③日程・内容

時 間	内 容	講 師 等
14:00～14:10	あいさつ 日程及び研修目的・内容の説明	大阪大谷大学教育福祉学部 学部長 岡崎 裕子 准教授 小田 浩伸
14:10～15:00	講義・実習「プレゼンテーション作成実習」 ◇プレゼンテーション全体（または一部）へのBGM入れ方 ◇各種効果の操作スキル(取込み) ◇効果的なプレゼンテーションスキル	大阪大谷大学教育福祉学部 講師 開沼 太郎
15:00～15:10	休 憩 ・ 移 動	
15:10～16:40	演習「プレゼンテーション演習」 ◇発達障害（ADHD）のプレゼンテーション 発表者：府立中津養護学校 村川 幸徳 ◇聾学校のプレゼンテーション 発表者：府立堺聾学校 河合 りえ	大阪大谷大学教育福祉学部 学部長 岡崎 裕子 准教授 小田 浩伸 大阪府教育委員会 指導主事 藤原 彰子
16:40～17:00	協議・情報交換・事務連絡 ◇地域支援の現状と課題 ◇研修課題の進捗状況 ・プレゼンテーション課題、アセスメント課題 ◇次回連絡 ・高等学校への巡回相談実習について	大阪大谷大学教育福祉学部 准教授 小田 浩伸 大阪府教育委員会 指導主事 藤原 彰子

④研修評価

プレゼンテーション研修の2回目で、作成スキル演習（各種効果：音効果を中心に）と、プレゼンテーション演習（学校紹介・発達障害）を行った。演習では、モデル発表者として2名が、発達障害（ADHD）の理解と支援に関する内容と、聾学校の実践と学校紹介プレゼンテーションを行った。モデル発表者のプレゼンテーションの説明の仕方や資料作成等を基に、さまざまな観点から討論を行い、スライドにおける文字の大きさや配置の仕方、ポイントを絞った発表の仕方等の話題についての意見交換等を行った。

研修評価アンケートと感想からは、このスキルアップへのニーズが高まってきていることが推察され、特に、プレゼンテーションによる伝え方（情報提供の仕方）の工夫を意識的に行っていくことの重要性を再確認できたものと考えられる。スライド作成スキルの向上が確認された。



< 第 11・12 回研修 >

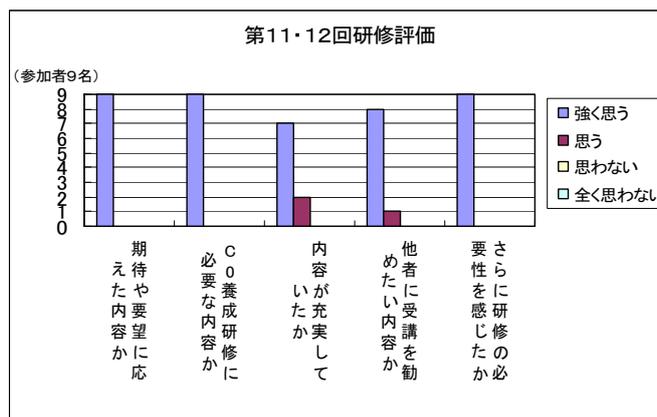
- ①日 時 平成 19 年 11 月 6 日(火) 10:00~17:00
- ②会 場 大阪府立〇〇高等学校
- ③日程・内容

時 間	内 容	講 師 等
10:00~10:30	あいさつ・オリエンテーション 府立〇〇高等学校長より 府立〇〇高等学校の実践紹介 (相談対象生徒の概要説明) 事務連絡	府立〇〇高等学校 校長 * * * * 教諭 * * * * 大阪大谷大学・大阪府教育委員会
10:40~12:20	授業参観(2限目:100分授業)	7教室の授業公開 (相談対象生徒:3教室)
12:20~13:05	昼食・休憩	
13:05~13:50	授業参観(3限目)	4教室の授業公開 (相談対象生徒:2教室)
14:00~14:50	相談支援協議 「事例検討にむけた事前協議」 * 研修受講者による事例検討準備	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸 大阪府教育委員会 障害教育課 指導主事 藤原 彰子 大阪府教育センター 指導主事 南部 潔 大阪大谷大学 教育福祉学部 教授 和田 野 康子
15:00~16:40	事例検討会 「高校教職員との事例検討会」	
16:40~17:00	相談研修の振り返り 事務連絡	

④研修評価

大学と高等学校が連携し、高等学校における巡回相談実習を実施した。巡回相談の流れとしては、午前と午後に授業参観(計11教室)を行い、午後から相談支援協議として事例検討相談実習を行った。研修終了後には、大学教員等から、相談に関する助言や反省点などが指摘された。

こうした高等学校への本格的な巡回相談(7名の授業参観から相談まで)は、全員が初めての体験であったことから、高等学校の特別支援の現状と課題を考える貴重な機会となった。研修評価アンケートや感想からも、特別支援学校から高等学校への支援のあり方について、考えやアイデアが出されていた。特に、ソーシャルスキルと就労への支援については、共通してその必要性が指摘されていた。



< 第 13・14 回研修 >

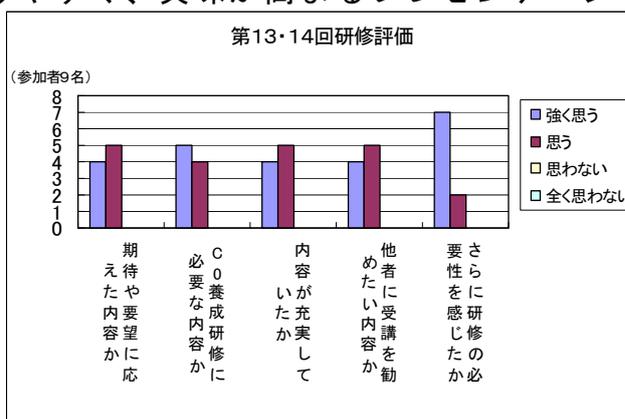
- ①日 時 平成 19 年 12 月 26 日(水) 10:00～17:00
- ②会 場 大阪府教育センター
- ③日程・内容

時 間	内 容	講 師 等
10:00～10:10	あいさつ 日程及び研修目的・内容の説明	大阪府教育委員会 指導主事 藤原 彰子 大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
10:10～12:00	演習「プレゼンテーション演習(1)」 ◇肢体不自由養護学校プレゼンテーション ◇知的障害養護学校プレゼンテーション	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸 大阪府教育センター 指導主事 羽谷 幸司
12:00～13:00	昼食・休憩	
13:00～16:10	演習「プレゼンテーション演習(2)」 ◇発達障害の理解と支援に関する プレゼンテーション * LD、ADHD、高機能自閉症、 アスペルガー症候群	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸 大阪府教育委員会 指導主事 藤原 彰子 大阪府教育センター 指導主事 羽谷 幸司
16:10～16:20	休 憩	
16:20～16:50	研究協議「プレゼンテーションスキルの 意義と研修の在り方について」	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸 大阪府教育委員会 指導主事 藤原 彰子 大阪府教育センター 指導主事 羽谷 幸司
16:50～17:00	事務連絡	

④研修評価

プレゼンテーション研修の3回目で、各学校紹介のプレゼンテーションと、発達障害（LD・高機能自閉症等）の理解と支援に関するプレゼンテーション演習を行った。午前・午後の研修として実施したが、全員のプレゼンテーション（発表とスライド作成）におけるスキルアップのための意見交換を十分に取ることができなかった。研修評価アンケートや感想においても同様の意見が多く、この点については、研修プログラムとして、時間の設定を再検討していく必要性が残された。特に、発表（説明・講義）の仕方については、聴講者が分かりやすく、興味が高まるプレゼンテーションスキルのバージョンアップが必要で、コーディネーターの資質とスキルとして重要な要素になると考えられた。

学校紹介における個人情報の扱いについても情報交換できた。



<第15回研修>

- ①日 時 平成19年11月～平成20年3月のいずれかの巡回相談
 ②会 場 幼稚園・小中学校・高等学校
 ③日程・内容

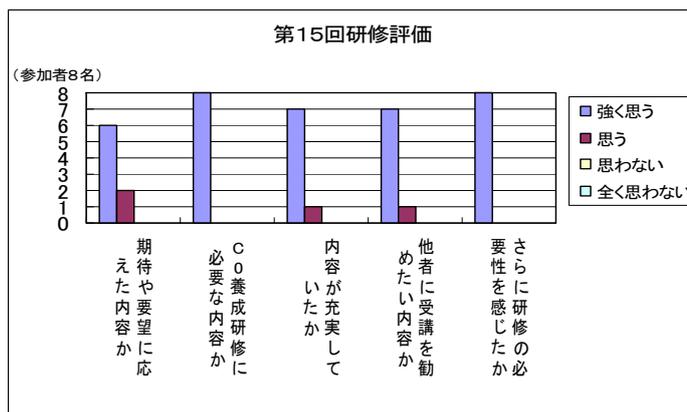
時 間	内 容	講 師 等
9:30～10:20	小学校の巡回相談研修（1） （低学年の授業参観）	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
10:20～11:10	小学校の巡回相談研修（2） （高学年の授業参観）	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
11:10～11:20	休 憩	
11:20～12:00	低学年の教育相談（事例検討会）	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
12:00～12:40	高学年の教育相談（事例検討会）	
12:40～13:00	全体のまとめ	

④研修評価

第15回研修は、平成19年11月～平成20年3月の間に行われる大学教員が行っている巡回相談に1回以上同行して、巡回相談実習を行うこととした。結果としては、幼稚園4園・小学校1校・中学校1校・高等学校1校で巡回相談実習を実施した。複数の巡回に参加した受講者もいた。校種については、研修者個人の課題に応じて選択可能としたが、幼稚園を希望する人が多かった。幼小連携への関心の高さがあらわれているものと考えられる。

研修評価アンケートと感想からは、巡回相談の経験を積むことの大切さと、難しい事例については、すぐにアドバイスを受けることができるシステムの構築を望む考えが多く示されていた。中学校への巡回相談を通しては、特別な支援を必要とする生徒だけでなく、授業妨害する生徒への対応の難しさを痛感し、中学校への支援のあり方を再考する必要性を感じた。

巡回相談は、園・学校、教員・保護者が力をつけるために行われるものであり、そのためには、事前準備を念入りしておくことが重要である。



< 第 16 回研修 >

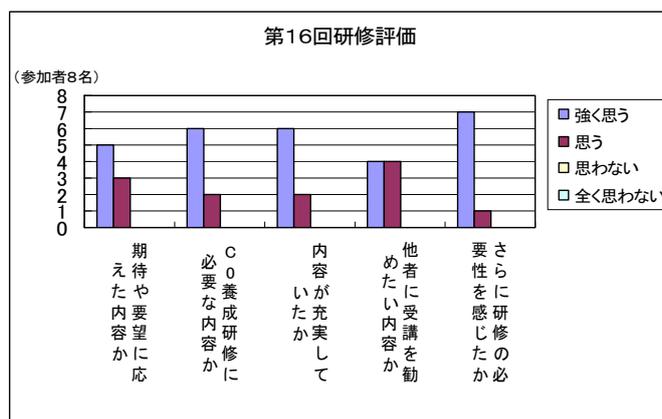
- ①日 時 平成 20 年 2 月 18 日 (月) 14:00~17:00
- ②会 場 大阪大谷大学
- ③日程・内容

時 間	内 容	講 師 等
14:00~14:10	あいさつ 日程及び研修目的・内容の説明	大阪府教育委員会 指導主事 藤原 彰子 大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
14:10~15:30	<演 習> 「事例研究 一見立てから課題設定まで」 ※アセスメント・教育相談・ プレゼンテーションスキルの総合活用	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
15:30~15:40	休 憩	
15:40~16:30	<オリエンテーション：協議> ①研修の評価とまとめ（個別の研修計画） ②研修修了後の連携について ③研修成果について等	大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
16:30~16:50	<研修総括> 大阪大谷大学より 大阪府教育委員会より 修了証について	大阪大谷大学 教育福祉学部 学部長 岡崎 裕子 大阪府教育委員会 指導主事 藤原 彰子 大阪大谷大学 教育福祉学部 准教授 小田 浩伸
16:50~17:00	事務連絡	

④研修評価

総合的な実践演習として、グループでの事例検討協議を実施した。実態把握とともに検査結果を解釈し、その結果を授業や指導にどう活かしていくかについて、演習形式で討議を深めた。コーディネーターとして必要な活動を、チームで考えて実践し、評価していく重要性を確認した。

研修評価アンケートと感想を総合すると、演習・討議の中で意見交換することによって、新たな視点でとらえることができるようになり、チームアプローチの大切さを実感したことや、アセスメント解釈スキルを高める必要性を感じたこと等が挙げられた。



(2) 研修の成果

専門性の高い盲・聾・養護学校（特別支援学校）の特別支援教育コーディネーター養成をめざしたアドバンス研修として、アセスメントスキル、巡回相談スキル、プレゼンテーションスキルの3つのスキル習得を機軸とした実践的な研修カリキュラム開発のための計16回の研修を行った。

研修成果について、①3つのスキルアップについての成果、②コーディネーターとしての活動の成果、③ネットワークづくりとしての成果、④大学と大阪府教育委員会との連携についての成果の観点から報告する。

①3つのスキルアップについての成果

アセスメントスキル研修については、「実施スキル→解釈スキル→指導に活かすスキル」の一連のスキルアップを前提に取り組んできた。実施スキルについては、これから検査スキルを学ぶ人たちへの指導・助言の役割を担う研修を体験したことで改めて検査マニュアルを詳細に読み、間違いやすい部分を再確認した等、今までと違った視点からさらなる検査スキルアップができたという感想が多く得られた。本研修受講者のような一定の検査スキルと経験を有した人の研修内容としては、スキル講習よりも指導・支援演習で実際に人に教え支援する内容が有効であることが確認できた。解釈から指導に活かす（指導計画）スキルについては、日常的な事例検討の中でスーパーバイズを受けたり、意見を交換する機会をつくっていくことの重要性が示された。

巡回相談スキル研修については、従来大阪府が実施してきた盲・聾・養護学校（特別支援学校）の地域支援コーディネーターにおいて未実施であった、幼稚園と高等学校への巡回相談実習を計画した。まだ特別支援教育体制が整備されていない（特別支援学級がない）幼稚園と高等学校への巡回相談実習では、新しい経験と新しい問題意識が生まれたことが大きな成果であった。特に、高等学校への巡回教育相談の中で、高等学校への支援のニーズは何か、盲・聾・養護学校（特別支援学校）としてどのような支援ができるのかといった具体的な検討ができたことが今後に繋がる有益な研修となった。

本研修プログラムで幼稚園・小中学校・高等学校のいずれか3つの校舎への巡回相談を実施し、巡回相談の事前準備、実際の手順、報告書作成等の一

連の巡回相談スキルを習得できたと考えられる。

プレゼンテーションスキル研修については、地域支援として幼稚園や小中学校等で研修担当する際に活用できるプレゼンテーションスライドや配付資料を作成することと、わかりやすいプレゼンテーションのあり方を実際に検討する演習を進めてきた。2つの作成課題について、学校紹介は各自で、発達障害の理解と支援についてはチームで、作成から発表までを行った。各学校の紹介については、本研修プログラムで習得した動画や音声の取り込みスキルを活用して、プレゼンテーション教材を作成した。その際に、学校での子どもの個人情報をもどのように配慮するかについての論議も行った。発達障害に関するテーマのプレゼンテーションでは、スライドの文字の大きさ、背景の色、効果の使い方、時間配分とスライドの枚数、声の大きさと表現力などの意見交換を行いながら、スライド作成を仕上げた。

プレゼンテーションに関する上記のような研修を、特別支援教育コーディネーター研修に取り入れている例は全国的にも少ないと思われる。他の教員や保護者等にどのように「わかりやすく説明できるか」というスキルは、コーディネーターに確実に求められるものである。今回の内容は、モデルカリキュラムとしての重要な情報発信になると考えられる。

②コーディネーターとしての活動の成果

本研修受講者9名は、すでに校内や地域でのコーディネーターの活動を始めている、または始めようとしている教員である。本研修プログラムでスキルアップした専門性を今年度の中で発揮している場合が多く、研修と実践が連動して進められたものと考えられる。つまり、実践的な研修内容として、演習・実習・討議を多く設定したことが、コーディネーターとしての活動に直接結びついてきたものと考えられる。受講者の中には、次年度から本格的に校内組織として地域支援を担当する教員が複数いることも、本研修プログラムの成果といえる。

③ネットワークづくりとしての成果

本研修プログラムは、少人数制で、チームでの演習・実習・討議形式を中

心に行ってきた。また、実習報告書の作成や準備作業等の受講者間のやりとりを電子メールで頻繁に行うなど、チームでのアプローチを進めてきた。その結果、受講者間のネットワークが確立し、情報交換や共有が有機的に行われるようになってきた。本研修プログラムにおける少人数制の取組の効果として挙げられる。

④大学と大阪府教育委員会との連携についての成果

大学側からみた連携研修の成果としては、大阪府としての施策や課題に対応した内容をプログラムに加味することが可能となった点があげられる。また、巡回相談等による学校との連携を進める上でも有効であったと考えられる。

府や市町村主催の研修では、公平性や希望制を基本とするため、本研修プログラムのような少人数制の形態をとることは難しい。少人数制で確かな専門性を高める方略として、大学が教育委員会と連携する本プログラムのような研修を開発することの意義は大きいと考えられる。

今後は、ゲストティーチャーとして研修受講者に大学での教職関連講義を依頼することも計画している。学生側からすれば、臨場感ある教育実践演習は教育理論と実践をつなぐものとなり、研修受講者側からみれば、わかりやすい説明技法を駆使した授業の実践研修の場となるであろう。大学の教員養成プログラムとの連携協力もすすめていきたい。

今回のプログラム開発における連携協力で、大学側においても教育現場のリアルタイムのニーズに深くふれ、現場の経験知を研究面で支援する必要性を再認識することとなった。多様な領域をもつ大学であるからこそできる学際的研究もあり、今後継続的に検討する予定である。

6 研修の課題とその改善策について

本プログラムによる研修修了後のアフターケアについて、大学担当者と受講者とのメールによる情報交換、及び、大学オープン講座の優先参加、研修修了者の授業参観等による継続的な指導や関わりができるような連携協力を継続して進めていきたい。

本研修プログラムの受講者は、盲・聾・養護学校(特別支援学校)教員に限

定して行ってきたが、今後は、小中学校の教員を対象に加えていくことも検討したい。期待される効果としては、特別支援学校の教員と小中学校の教員との共有した専門的な研修によるネットワークづくりである。特別支援教育の地域体制の課題であるネットワークづくりに寄与できる研修プログラムの開発へと進めていきたいと考えている。

今後に向けた改善策としては、次のことが考えられる。

- (1) 小中学校と特別支援学校特別支援教育コーディネーターの合同アドバンス研修に展開していく。
- (2) 演習・実習・討議による研修形態をさらに多くして、チームでのアプローチを徹底して進めていく。
- (3) 個別の研修計画の活用をより機能的にするために、研修プロセスと成果を明確に示していく（本人、大学、府市教委、所属長による共有化等）。
- (4) 研修受講者から要望があった、教材作成スキルをプログラムに導入する。
- (5) 本研修プログラム開発に必要なことについて、府教育委員会とともに、市町村教育委員会との連携を進めていく。

<別紙1> 平成19年度盲・聾・養護学校特別支援教育コーディネーターアドバンス研修

回	日程(会場)	研修内容	講師等
1	5月21日(月) 14:00~17:00 (大阪大谷大学)	<事前オリエンテーション及び個別の研修計画の作成> ①アセスメントスキルコースについて ②プレゼンテーションスキルコースについて ③教育相談(巡回相談)スキルコースについて	大阪大谷大学 学部長 岡崎裕子 教授 和田野康子 准教授 小田浩伸 大阪府教育委員会 総括主査 松村高志 指導主事 藤原彰子
2 ・ 3	6月18日(月) または 6月26日(火) 9:30~17:00 (〇〇立〇幼稚園)	<教育相談(巡回相談)スキル研修(1)> *幼稚園への巡回相談実習(大学教員に同行) ・事前準備と情報分析、事例検討の進め方 ・巡回相談報告書の作成、アフターケアの在り方	大阪大谷大学 准教授 小田浩伸 学部長 岡崎裕子 教授 和田野康子 大阪府教育委員会 指導主事 藤原彰子
4	7月17日(火) 14:00~17:00 (大阪大谷大学)	<プレゼンテーションスキル研修(1)> ①プレゼンテーションの意義・活用・倫理(講義) ②プレゼンテーションの基礎・応用スキル(演習) ③プレゼンテーションの作成演習(課題の提供)	大阪大谷大学 学部長 岡崎裕子 准教授 金川 廣一郎 講師 開沼 太郎 准教授 小田浩伸
5	8月27日(月) 9:30~12:30 (大阪大谷大学)	<アセスメントスキル研修(1)> ①アセスメントの実際(行動観察、情報収集、検査法) ②検査法演習(重度・重複障害者の検査法、チェックリスト等) ③養護学校におけるアセスメントの実際	大阪大谷大学 准教授 小田浩伸
6	8月27日(月) 14:00~17:00 (大阪大谷大学)	<アセスメントスキル研修(2)> ①WISC-Ⅲ検査法の実際と結果解釈について ②検査を実施した事例の総合解釈 ③個別の指導計画への活用	大阪大谷大学 准教授 小田浩伸
7 ・ 8	8月28日(火) 10:00~17:00 (大阪大谷大学)	<アセスメントスキル研修(3)> ①K-ABC検査法の実際と結果解釈について ②事例の総合解釈及び指導計画への活用 ③アセスメントに関する研究協議	大阪大谷大学 准教授 小田浩伸
9	9月3日(月) 14:00~17:00 (府教育センター)	<本カリキュラムの中間振り返り及び教育課題研究協議> ①今までの研修内容と今後の研修内容の在り方 ②盲・聾・養護学校における専門性向上の在り方 ③小・中学校等への地域支援のための現状課題等	大阪大谷大学 准教授 小田浩伸 大阪府教育委員会 藤原彰子 大阪府教育センター 伊丹昌一
10	10月1日(月) 14:00~17:00 (大阪大谷大学)	<プレゼンテーションスキル研修(2)> ①プレゼンテーション演習と協議(模擬:学校紹介) ②プレゼンテーション演習と協議(模擬:発達障害研修)	大阪大谷大学 講師 開沼 太郎 准教授 小田浩伸 学部長 岡崎裕子
11 ・ 12	11月6日(火) 10:00~17:00 (府立〇〇高等学校)	<教育相談(巡回相談)スキル研修(2)> *高等学校への巡回相談実習(大学教員に同行) ・事前準備と情報分析、事例検討の進め方 ・巡回相談報告書の作成、アフターケアの在り方等	大阪大谷大学 小田浩伸 和田野康子 大阪府教育委員会 指導主事 藤原彰子 大阪府教育センター 指導主事 南部 潔
13 ・ 14	12月26日(水) 9:30~17:00 (府教育センター)	<プレゼンテーションスキル研修(3)> ①プレゼンテーションの実際(準備から当日まで) ②プレゼンテーション演習(効果的な方法・応用等) ③プレゼンテーション教材(スライド・コンテンツ)の共有CD化	大阪大谷大学 准教授 小田浩伸 大阪府教育委員会 藤原彰子 大阪府教育センター 羽谷幸司
15	1月22日(火) 13:00~17:00 (小中学校)	<教育相談(巡回相談)スキル研修(3)> *小学校または中学校への巡回相談実習 ・事前準備と情報分析、事例検討の進め方 ・巡回相談報告書の作成、アフターケアの在り方等	大阪大谷大学 准教授 小田浩伸
16	2月18日(月) 14:00~17:00 (大阪大谷大学)	<事例研究—3つのスキルの総合活用研修—> *アセスメント・教育相談・プレゼンテーションスキルの総合活用 <オリエンテーション> ①研修の評価とまとめ(自己目標の評価と今後の課題) ②研修終了後の連携の在り方について ③成果について・総括	大阪大谷大学 学部長 岡崎裕子 准教授 小田浩伸 大阪府教育委員会 指導主事 藤原彰子

個別の研修計画(1):実例

名前	〇〇 〇〇〇	所属	大阪府立〇〇養護学校
スキル	各スキルにおける自己課題		
アセスメント スキル	◆WISC-Ⅲ、K-ABCの解釈スキル、及び検査結果に基づく指導計画立案スキルの向上 (複数の事例で、検査実施→指導計画立案までを、一人でできる力をつける) ◆知的障害のある自閉症の児童生徒を対象とした実態把握スキルの向上 (行動観察のためのチェックリストの開発・活用、既存の検査のテストバツリ等)		
プレゼンテ ーション スキル	◆「特別支援教育」「発達障害」「個別の教育支援計画」「知的障害養護学校における自立活動」等 について、わかりやすく説明するスキルの習得 ◆わかりやすい話し方、ことばの使い方等についての技術向上		
巡回相談 (教育相談) スキル	◆幼稚園・中学校・高等学校への巡回相談実習 (今まで経験したことのない校種での巡回相談体験) ◆学校組織の力を高めるための巡回相談のあり方についての検討 (校内委員会への関わり方、事例検討会の進め方、市教委との連携等)		

本研修における重点課題・目標・内容・評価	
重点課題 (優先順位) ◎・○・△	(◎) アセスメントスキル (△) プレゼンテーションスキル (○) 巡回相談(教育相談)スキル
研修目標	◆WISC-Ⅲ、K-ABC、ITPA等の検査結果と、行動特性及び学習状況等をふまえて、一人一人の実態に応じた指導計画を作成することが一人でできる。
研修内容	◆年間5事例以上、検査結果と行動観察をもとに、「個別の指導計画」を作成する。 ・WISC-Ⅲ、K-ABC、またはITPAを実施し、検査結果の解釈を行う。 ・行動観察及び保護者や担任からの聞き取りをもとに、本人の教育的ニーズを把握する。 →「個別の指導計画」を作成する。一定期間、取組を行った後で、児童・生徒の変化について検証する。必要に応じて、再計画を行う。
自己評価の観点 (評価の実施時期 : 年度末)	①5事例以上、検査を実施し、「個別の指導計画」を作成できたか。 ②検査結果と作成した「個別の指導計画」を、第三者に説明できたか。 ③担任が取り組むことができる、具体的な内容を含む計画を作成できたか。 ④「個別の指導計画」の評価や再計画ができたか。

--	--

別紙2-②

個別の研修計画(2): 実例

日時	研修記録(研修内容・場所・自己評価等)	◆校外支援	◇校内支援
5/18 (月) 10:00~17:00	◆〇〇市立〇〇幼稚園巡回相談 内容…授業参観、事例検討→園内委員会 (3歳児の事例を3名のチームで担当) 課題…担当者内での役割分担を明確にしなが、事前打合せを行うことが必要である。		
5/15 (火) 15:00~17:30	◆〇〇市立〇〇小学校教育相談 内容…担任・校長・保護者との面談/WISC-Ⅲの実施 課題…検査結果をもとに、通常学級でできる支援を考える力をつけていくこと。		
5/23 (水) 14:00~16:30	◆〇〇研修における研修講師 内容…「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成に向けて(講義・演習) 課題…保育所の実態を知った上で、もう少し具体的な話ができる力が必要である。		
6/27 (水) 9:00~10:30	◇本校小学部児童教育相談(自立活動相談): 校内支援 内容…担任の要望に基づいて、K-ABCを実施 成果…担任の気づきと検査結果を基に、具体的な取組を一緒に考えることができた。		
8/23 (木) 9:30~11:30	◆〇〇市立〇〇小学校校内研修講師 内容…特別支援教育の概要と校内支援体制構築に向けて(講義) 課題…他の学校での校内委員会の実践例を入れてわかりやすく伝える工夫が必要である。		
8/30 (木) 9/7 (金)	◇本校高等部生徒教育相談(自立活動相談): 校内支援 内容…担任の要望に基づいて、WISC-Ⅲを実施 課題…WISC-Ⅲの分析が難しい事例だったため、他の先生に助言を頂いた。		
9/12 (水) 13:00~14:30	◇本校高等部生徒教育相談(自立活動相談): 校内支援 内容…担任・保護者の要望に基づいて、ITPA言語学習能力診断検査を実施 課題…検査場面での気づきを、日常生活場面での関わりにどう活かすか検討が必要である。		
9/21 (金) 10:30~12:00	◇本校高等部生徒教育相談(自立活動相談): 校内支援 内容…担任の要望に基づいて、WISC-Ⅲを実施 課題…生徒の実態について他機関と共通理解を図り、支援を進めることが必要である。		
10/3 (水) 15:30~17:00	◆〇〇市立〇〇園職員研修講師 内容…「個別の支援計画」の作成と活用について(講義・演習) 成果…講義だけではなく、「子どもの行動のとらえ方」についての演習ができた。		
10/15 (月) 10:30~12:00	◇本校高等部生徒教育相談(自立活動相談) 内容…担任・進路担当者の要望に基づいて、ITPA言語学習能力診断検査を実施 課題…進路先(企業)に本人の実態を理解してもらうための伝え方には工夫が必要である。		
11/6 (火) 10:00~17:30	◆府立〇〇高等学校巡回相談 内容…授業参観、事例検討→校内委員会(A生徒の事例を3名で担当) 課題…高等学校が養護学校にどのような支援を求めているかの理解が必要である。		
12/19 (木) 13:30~15:00	◇本校小学部児童教育相談(自立活動相談): 校内支援 内容…担任の要望に基づいて、ITPA言語学習能力診断検査を実施 成果…日常生活の中だけでは気づくことができない本児の特性が明らかになった。		
2/27 (水) 13:30~15:00	◆〇〇市立〇〇小学校教育相談 内容…授業参観/養護学級担任・校長・保護者との面談/WISC-Ⅲの実施		

成果…検査結果をふまえ、本人の特性を保護者に理解してもらうことができた。

別紙2-③

個別の研修計画(3):実例

【研修目標がどの程度達成されたかについての評価】～自己評価の観点に基づく評価

- ①校外支援・校内支援を合わせて、8事例で検査を実施することができた。また、他の教員が行った検査（検査補助として参加）の解釈については、担当教員とともに3事例行うことができた。
- ②担任や保護者に説明する前に、他の教員に説明する機会をできるだけ設け、その中で検査結果の解釈や具体的な指導方法の意見交換を行う場面を設けた。全ての事例で行うことは難しかったが、やはり『人に説明する』という活動を行うことにより、自分自身で子どもの課題が整理できたり、自分一人では気づけなかったことを指摘してもらうことができ、大変有益であった。
- ③小学校の通常学級でできる指導・支援方法を考えることが特に難しかった。また、小学校・養護学校どちらの事例においても、担任や保護者があらかじめ本人の実態を整理してとらえることができている場合は、検査結果をもとに具体的な取組を考えることがしやすかった。しかし、『本人の特性を理解する』ことが検査を行う目的の中心になってしまった事例もあったのは、反省すべき点であった。
- ④担任とともに目標を決め、一定期間取組を行った後で、評価と再計画を行うことができた（8事例中6事例で実施）。そのことにより、子どもの変化のみならず、指導者側の関わりの工夫等を聞くことができ、今後の相談に活かすことができる情報を収集することができた。

【本研修(1年間)を振り返って成果がみられたこと】

- ◇実態把握（各種検査＋行動観察等）から指導計画作成までの流れについて、どのように情報を整理していくかについてのマニュアルを、自分で作成することができた。また、アセスメント研修の際、指導補助という役割を担ったことを契機に、検査の意義等について再確認することができた。これらのことにより、以前に比べると、『検査をどう指導に活かすか』を論理的に考えることができるようになってきた。
- ◇パワーポイントを活用してプレゼンテーションを行う際、ソフトの技術をたくさん使うことよりも、『プレゼンテーションの目的』を明確にすることがまず大事であるということ学ぶことができた。実際に講義や演習でプレゼンテーションを行う際、ポイントを絞って伝えることが少しずつできるようになってきた。
- ◇幼稚園や高等学校への巡回相談を経験することにより、やはり実際の教育現場がどのような状況にあるのか、まずは実際に自分の目で見ること、そして先生方の話を聞くことが何よりも大事であることに改めて気づくことができた。また、『一人ひとりの子どもを見ること』と『集団の中の一員として子どもを見ること』のバランスをとることができるようになってきた。

【研修全般についての評価】

- ・3つのスキルを高めていく研修内容が総合的に構成されていることが本研修の特徴であると感じた。日頃は、自分の興味のあるところは学ぶ機会もあるが、その他の分野のことについては意識を向けずに過ごしてしまうことが多いので、このような研修の機会は非常に有意義であった。
- ・年度当初に『研修目標』を立てることで、自分自身の課題を明確にすることができた。また、その目標を周りの先生方に伝えることにより、協力を得ながら1年間の研修を進めることができた。

【今後の課題と展望】

- ・アセスメントスキルの向上のために、検査結果を他者に説明し、意見交換を行う場を積極的に設けること。また、他の教員に検査のための技術を伝え、解釈を共に行う機会を増やすこと。
- ・幼稚園、小学校等への巡回相談を通して、『集団の中でできる支援』について考える経験を積むこと。また、他の先生方が行っている事例から学ぶ機会を増やすこと。

対象児	B（4歳：〇〇〇組）	相談担当者	〇〇（〇〇学校）、〇〇（〇〇学校）
主訴	<p>・クラスにいる時間を増やし、『友達と一緒にいたら楽しい』ということを理解してほしい。</p> <p>・自分の楽しんでいることを中断するように促されると、『ギャーッと大きな声で叫ぶ』『保育者につばをかける』『保育者を噛む』等の行動がみられるが、それらの行動が少なくなってほしい。</p>		
子どもの様子（◇行動観察より ◆担任より）		今後の取組に向けて	
<p>◇アンパンマンのビデオが終わると、大きな声を出したり、泣き出したりする。隣のクラスで見ているときに、先生が「3、2、1」と予告してからビデオを消す時に、その声かけに注目している。</p> <p>◆アンパンマンやウルトラマンが好きで、教室から離れているときでも、「アンパンマン始まるよ」等の声かけで戻ってくるができる時もある。</p> <p>◆ビデオは、巻き戻しをせずに途中から見せたりすることが多いため、区切りのいいところで終わるとは限らない。先日、『終わったら紙芝居を見せる』という形で提示すると、泣かずに終わることができた場面があった。</p>		<p>★見通しを持つために（目で見てわかる関わりの工夫）</p> <p>ことばによる全体指示だけでは、時間や活動の流れを理解することが難しいことが、本児がクラスでの活動に参加できない1つの要素になっていると考えられる。アンパンマンのビデオを見ることは、本人にとって気持ちを切り替えるための効果的な方法の1つになっているようなので次の活動にうまくつなげていくために、「どれぐらい見たら終わりになるか」「終わったら次に何をするか」を、本児がわかる形で提示することを考えてはどうか。</p> <p>→ビデオが始まる前に、タイムタイマーや砂時計等を使って、『どれぐらい見たら終わりになるか』を提示する。</p> <p>→ビデオの次にする活動を、『実物を見せる』『本人が確実にわかることばで言う』等の方法で、タイミングよく提示する。</p>	
<p>◇教室から出る場面が何度かあったが、その時に保育士が、『後ろから声をかけて止める時』と、『前から座って話しかける時』とでは、本児の泣き方（声の出し方）が違っていた。</p> <p>◇教室から出たときも、最初から遠くに行くのではなく、少し離れたところに行っては戻り、入り口付近まで来てはまた離れ、だんだんと距離が遠くなる様子がみられていた。また、保育士が抱っこ等で関わると、しばらくして教室と一緒に戻ることはできていた。教室に入ったときに、自分で状況を判断して、他児の行っている活動に参加することができる場面はみられなかった。</p>		<p>★安心感をはぐくむために（ていねいな関わり）</p> <p>歩行が不安定（踵がつかない、制止立位がとりにくい、肩に力が入っている）で、感覚面での過敏性（靴下をはかない、おせんべいを舐めて味を確かめようとする等）もあると思われる本児にとっては、『後ろから突然関わる』よりも、『前から関わる』方が受け入れやすいのではないか。また、クラスの場所や先生を意識して、そこを基点に行動しようとする姿がみられているところを伸ばしていくことを考えてはどうか。</p> <p>→教室から出るのを呼び止める際には、『前から関わる』ことを共通した関わりとして行う。</p> <p>→教室に戻ってきたときには、一緒に帰ってきた保育士が「ただいま」等の合図をし、それを受けて担任は『今何の活動をしているか』を、具体物や簡単なことばで伝えて活動に参加するように促す。</p>	

子どもの様子（◇行動観察より ◆担任より）	今後の取組に向けて
<p>◇本児が一番いきいきと活動していたのは、『おやつをもらってくる』という活動をしている時だった。</p> <p>◇おやつ場面では、教室に戻ってきてから「いただきます」の挨拶をするまでの間、落ち着いて座っていることができていた。</p> <p>◇本児から他児に関わる場面は、「自由遊びの場面で、他の子が持っているおもちゃを取ろうとする」「おやつ場面で、ヤクルトを自分が飲み終わったときに、向いの席の子のヤクルトにストローを挿そうとする」という2つの場面であった。</p> <p>◆シールを貼る活動のときに、「どっちにする？」と声かけをし、自分で選ぶように促すと応じる時がある。</p>	<p>★自信を持つために(できる課題)</p> <p>日常の中では、誉められることよりも、注意される場面がどうしても多くなってしまいうだろうが、本児が自信を持ってできる目的を持った活動（誉められること）を増やしていくという視点からの取組が必要ではないか。</p> <p>→『職員室へのおつかい』は、本人にとって好きな場所なので行きやすいのではないか。「～をもらってきて」「～先生に～をもらってきて」等の場面を設定し、ものや人を本児が分かる形（写真や絵等）で提示してはどうか。</p> <p>→本児が帰ってきたときには、「～先生に～もってきてくれたんやね」等、行った行動をことばでフィードバックし、行動とことばがつながるようにしていく。また、一人で行くことが定着してきたら、友達と一緒に行く活動にも展開してはどうか。</p>

☆「キーワード」

特別支援学校 特別支援教育コーディネーター、コーディネーター養成研修、

巡回相談、アセスメント、プレゼンテーション、幼稚園、小学校、中学校、高等学校

☆「人数規模」

A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上

☆「研修日数（回数）」

A. 1日以内
（1回） B. 2～3日
（2～3回） C. 4～10日
（4～10回） D. 11日以上
（11回以上）

【問い合わせ】

大阪大谷大学

教育福祉学部

〒583-8540

大阪府富田林市錦織北3-11-1

TEL 0721-24-0381